おきなぐさ

宮沢賢治

うずのしゅげを知っていますか。

うずのしゅげは、植物学ではおきなぐさと呼ばれますが、おきなぐさという名はなんだかあのやさしい若い花をあらわさないようにおもいます。

そんならうずのしゅげとはなんのことかと言われても私にはわかったようなまたわからないような気がします。

それはたとえば私どもの方で、ねこやなぎの花芽をべんべろと言いますが、そのべんべろがなんのことかわかったようなわからないような気がするのと全くおなじです。とにかくべんべろという語のひびきの

中に、あの柳の花芽の銀びろうどのこころもち、なめらかな春のはじめの光のぐあいが実にはっきり出ているように、うずのしゅげというときは、あの毛※科のおきなぐさの黒朱子の花びら、青じろいやはり銀びろうどの刻みのある葉、それから六月のつやつや光る冠毛がみなはっきりと眼にうかびます。

まっ赤なアネモネの花の従兄、きみかげそうやかたくりの花のともだち、このうずのしゅげの花をきらいなものはありません。

ごらんなさい。この花は黒朱子でもこしらえた変わり型のコップのように見えますが、その黒いのは、

たとえば葡萄酒が黒く見えると同じです。この花の下を始終往ったり来たりする蟻に私はたずねます。

「おまえはうずのしゅげはすきかい、きらいかい」

蟻は活発に答えます。

「大すきです。誰だってあの人をきらいなものはありません」

「けれどもあの花はまっ黒だよ」

「いいえ、黒く見えるときもそれはあります。けれどもまるで燃えあがってまっ赤な時もあります」

「はてな、お前たちの眼にはそんなぐあいに見えるのかい」

「いいえ、お日さまの光の降(ふ)る時なら誰(だれ)にだってまっ赤に見えるだろうと思います」

「そうそう。もうわかったよ。お前たちはいつでも花をすかして見るのだから」

「そしてあの葉(は)や茎(くき)だって立派(りっぱ)でしょう。やわらかな銀(ぎん)の糸が植(う)えてあるようでしょう。私たちの仲間(なかま)では誰(だれ)かが病気(びょうき)にかかったときはあの糸をほんのすこうしもらって来てしずかにからだをさすってやります」

「そうかい。それで、結局(けっきょく)、お前たちはうずのしゅげは大すきなんだろう」

「そうです」

「よろしい。さよなら。気をつけておいで」

この通りです。

また向(む)こうの、黒いひのきの森の中のあき地に山男がいます。山男はお日さまに向(む)いて倒(たお)れた木に腰掛(こしか)けて何か鳥を引き裂(さ)いてたべようとしているらしいのですが、なぜあの黝(くろず)んだ黄金(きん)の眼玉(めだま)を地面(じめん)にじっと向(む)けているのでしょう。鳥をたべることさえ忘(わす)れたようです。

あれは空地(あきち)のかれ草の中に一本のうずのしゅげが花をつけ風にかすかにゆれているのを見ているからです。

私は去年(きょねん)のちょうど今ごろの風のすきとおったある

日のひるまを思い出します。

それは小岩井農場（こいわいのうじょう）の南、あのゆるやかな七つ森のいちばん西のはずれの西がわでした。かれ草の中に二本のうずのしゅげが、もうその黒いやわらかな花をつけていました。

まばゆい白い雲が小さな小さなきれになって砕（くだ）けてみだれて、空をいっぱい東の方へどんどんどんどん飛（と）びました。

お日さまは何べんも雲にかくされて銀（ぎん）の鏡（かがみ）のように白く光ったり、またかがやいて大きな宝石（ほうせき）のように蒼（あお）ぞらの淵（ふち）にかかったりしました。

山脈（さんみゃく）の雪はまっ白に燃（も）え、眼（め）の前の野原は黄（き）いろや茶の縞（しま）になってあちこち掘（ほ）り起（お）こされた畑（はたけ）は鳶（とび）いろの四角（しかく）なきれをあてたように見えたりしました。

おきなぐさはその変幻（へんげん）の光の奇術（トリック）の中で夢（ゆめ）よりもしずかに話しました。

「ねえ、雲がまたお日さんにかかるよ。そら向（む）こうの畑（はたけ）がもう陰（かげ）になった」

「走って来る、早いねえ、もうから松（まつ）も暗（くら）くなった。もう越（こ）えた」

「来た、来た。おおくらい。急（きゅう）にあたりが青くしんとなった」

「うん、だけどもう雲が半分お日さんの下をくぐってしまったよ。すぐ明るくなるんだよ」

「もう出る。そら、ああ明るくなった」

「だめだい。また来るよ、そら、ね、もう向（む）こうのポプラの木が黒くなったろう」

「うん。まるでまわり燈籠（どうろう）のようだねえ」

「おい、ごらん。山の雪の上でも雲のかげがすべってるよ。あすこ。そら。ここよりも動（うご）きようがおそいねえ」

「もうおりて来る。ああこんどは早い早い、まるで落（お）ちて来るようだ。もうふもとまで来ちゃった。おや、

どこへ行ったんだろう、見えなくなってしまった」
「不思議（ふしぎ）だねえ、雲なんてどこから出て来るんだろう。ねえ、西のそらは青じろくて光ってよく晴れてるだろう。そして風がどんどん空を吹（ふ）いてるだろう。それだのにいつまでたっても雲がなくならないじゃないか」
「いいや、あすこから雲が湧（わ）いて来るんだよ。そら、あすこに小さな小さな雲きれが出たろう。きっと大きくなるよ」
「ああ、ほんとうにそうだね、大きくなったねえ。もう兎（うさぎ）ぐらいある」

「どんどんかけて来る。早い早い、大きくなった、白熊のようだ」
「またお日さんへかかる。暗くなるぜ、奇麗だねえ。ああ奇麗。雲のへりがまるで虹で飾ったようだ」
西の方の遠くの空でさっきまで一生けん命啼いていたひばりがこの時風に流されて羽を変にかしげながら二人のそばに降りて来たのでした。
「今日は、風があっていけませんね」
「おや、ひばりさん、いらっしゃい。今日なんか高いとこは風が強いでしょうね」
「ええ、ひどい風ですよ。大きく口をあくと風が僕

のからだをまるで麦酒瓶（ビールびん）のようにボウと鳴らして行くくらいですからね。わめくも歌うも容易（ようい）のこっちゃありませんよ」

「そうでしょうね。だけどここから見ているとほんとうに風はおもしろそうですよ。僕（ぼく）たちも一ぺん飛（と）んでみたいなあ」

「飛（と）べるどこじゃない。もう二か月お待（ま）ちなさい。いやでも飛（と）ばなくちゃなりません」

それから二か月めでした。私は御明神（ごみょうじん）へ行く途中（とちゅう）もう一ぺんそこへ寄（よ）ったのでした。

丘（おか）はすっかり緑（みどり）でほたるかずらの花が子供（こども）の青い

瞳のよう、小岩井の野原には牧草や燕麦がきんきん光っておりました。風はもう南から吹いていました。

春の二つのうずのしゅげの花はすっかりふさふさした銀毛の房にかわっていました。野原のポプラの錫いろの葉をちらちらひるがえし、ふもとの草が青い黄金のかがやきをあげますと、その二つのうずのしゅげの銀毛の房はぷるぷるふるえて今にも飛び立ちそうでした。

そしてひばりがひくく丘の上を飛んでやって来たのでした。

「今日は。いいお天気です。どうです。もう飛ぶば

かりでしょう」

「ええ、もう僕たち遠いとこへ行きますよ。どの風が僕たちを連れて行くかさっきから見ているんです」

「どうです。飛んで行くのはいやですか」

「なんともありません。僕たちの仕事はもう済んだんです」

「こわかありませんか」

「いいえ、飛んだってどこへ行ったたって野はらはお日さんのひかりでいっぱいですよ。僕たちばらばらになろうたって、どこかのたまり水の上に落ちようたって、お日さんちゃんと見ていらっしゃるんですよ」

「そうです、そうです。なんにもこわいことはありません。僕だってもういつまでこの野原にいるかわかりません。もし来年もいるようだったら来年は僕はここへ巣をつくりますよ」

「ええ、ありがとう。ああ、僕まるで息がせいせいする。きっと今度の風だ。ひばりさん、さよなら」

「僕も、ひばりさん、さよなら」

「じゃ、さよなら、お大事においでなさい」

奇麗なすきとおった風がやって参りました。まず向こうのポプラをひるがえし、青の燕麦に波をたてそれから丘にのぼって来ました。

うずのしゅげは光ってまるで踊（おど）るようにふらふらして叫（さけ）びました。

「さよなら、ひばりさん、さよなら、みなさん。お日さん、ありがとうございました」

そしてちょうど星が砕（くだ）けて散（ち）るときのように、からだがばらばらになって一本ずつの銀毛（ぎんもう）はまっしろに光り、羽虫（はねむし）のように北の方へ飛（と）んで行きました。そしてひばりは鉄砲玉（てっぽうだま）のように空へとびあがって鋭（するど）いみじかい歌をほんのちょっと歌ったのでした。

私は考えます。なぜひばりはうずのしゅげの銀毛（ぎんもう）の飛（と）んで行った北の方へ飛（と）ばなかったか、まっすぐに空

の方へ飛んだか。

それはたしかに、二つのうずのしゅげのたましいが天の方へ行ったからです。そしてもう追いつけなくなったときひばりはあのみじかい別れの歌を贈ったのだろうと思います。そんなら天上へ行った二つの小さなたましいはどうなったか、私はそれは二つの小さな変光星になったと思います。なぜなら変光星はあるときは黒くて天文台からも見えず、あるときは蟻が言ったように赤く光って見えるからです。

底本：「銀河鉄道の夜」角川文庫、角川書店
　　１９６９（昭和44）年７月20日改版初版発行
　　１９９３（平成５）年６月20日改版71版発行
入力：蔦田佳子
校正：平野彩子
ファイル作成：野口英司
２０００年8月25日公開
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。

●表記について

本文中の※は、底本では次のような漢字（JIS外字）が使われている。

毛※科（もうこんか）　莨

第4水準2-86-12